

小松町の打ち毀しこわ

十八世紀半ば以降、増加した都市の下層民が、物価高騰などを契機として、富裕な商人や町役人の家屋、家財道具を破壊する打ち毀しが全国各地で頻発

小松町の打ち毀し

発生年	西暦	月	原因・要求	形態
明和5年	1768	7月	米払底	不穏
明和5年	1768	12月	不作減免	強訴
天明4年	1784		飢饉	
文化5年	1808	閏6月	米価高騰	打ち毀し
天保7年	1836	8月	凶作・米価高騰	打ち毀し

『加越能近世史研究必携』(1995北國新聞社)、『加賀藩史料』より作成

した。小松町でも、こうした経済的困窮を理由とする打ち毀しがたびたび発生している。中でも大きな騒動は、文化五年(一八〇八)と天保七年(一八三六)に起こった。

文化五年夏、米価高騰が続き困窮した人々は、その原因が町年寄並久津屋三郎助と質屋兼米仲買小杉屋六兵衛にあると噂し、不満を募らせていた。閏六月二十七日深夜、勸婦寺の早鐘を合図に二、三〇〇人が集まり、徒党を組んで久津屋・小杉屋両家に押し寄せ、家屋や家財道具をことごとく



『坐右日記』通称「鶴村日記」(白山市立鶴来博物館所蔵) 鶴来出身の儒学者金子鶴村の日記。文化5年の打ち毀しについて詳細な記録がある。

破却する激しい打ち毀しを行った。彼らの行動は、太鼓や拍子木を合図に進退し、毀し役と防ぎ役に分かれ、合言葉で敵味方を区別するなど組織的なものであったという。これにより、米価は一升八八文から六五文まで下落した。しかし、首謀者とされた町人は磔や梟首（さらし首）となり、一方で町奉行河村茂三郎は指控の後に罷免、襲撃された町年寄並は所払いとなるなど騒動の責任を問われた。

天保七年は、当時の覚書に「何ヨリマサル喰ハザルノ年」(天保年中困窮日記)と記録されるほど凶作・飢饉が続き、米価を筆頭に物価全般が高騰した年であった。このため、加賀藩領内では、六月金沢、七月宮腰・本吉、十・十二月越中国砺波郡など、各地で打ち毀しや不穏な動きが発生。小松町でも、八月一日に米の小売商と町年寄の家五軒が打ち毀される騒動が起こった。

これらの打ち毀しに参加した人々は、いずれも「百姓躰」の姿をしていたが、首謀者は町人であり、町の貧民に能美郡や白山麓の村々の百姓が加わったものであった。首謀者とされた人々は、後世に義民として伝えられたという。

(堀井美里)



小松市東町の勤佛寺 文化5年打ち毀しの際、早鐘が鳴らされた。



「天保年中困窮日記」(「檀那講衆(覚)帳」浅田三郎氏所蔵) 北浅井村妙永寺恵龍による記録。天保4年から10年にかけて能美郡村々の困窮の様子や物価高について記したものだ。